

アイリス・マードックの作品に見る「善」について

— *A Fairly Honourable Defeat* の場合 —

中 窪 靖

はじめに

アイリス・マードック (1919–1999) はかなり多産な作家であった。80年の生涯に26篇の長編小説を書いた。1954年、彼女は *Under the Net* を世に問い、作家としてデビューを果たした。1960年代になると、彼女はほぼ1年に一作というペースでの執筆を続けた。当然、そのような状況の中で、好意的な批評に混じって彼女の作品を批判する声が大きくなり始めた。その中でいわゆる成功作とみなすことの難しい作品が生み出されたことも事実である。しかしながら、むしろ彼女の関心は、彼女の作品を発展進化させることにあったと言ってしまう。また、彼女にとっては、哲学的な思索を深めることも重要課題であった。彼女は、当時の隆盛であったイギリスの自由主義的ヒューマニズムとサルトルの唱える実存主義に代わる哲学を構築することを目指していた。¹

そうした中、マードックは1970年にそれまでの「善」についての彼女の論考をまとめ *The Sovereignty of Good* を出版した。この書物の中で、彼女は形而上学を見直すことにより、啓蒙主義の外に出ることをしない道徳哲学の復権を唱えた。² 彼女の作家活動において、「善」という概念は重要な位置を占めていた。また、同じ年に、彼女は小説 *A Fairly Honourable Defeat* を出版した。プラトンがそのイデア論の中で展開した洞窟の比喻を、マードックは次の

ように理解した。善を求めて道徳上の巡礼を行うことは、虚像（現実のものではないもの）しか見えない閉じ込められた世界を否定し、そこから善の光によって照らされている外の世界に出ることである。³ 彼女は、そのおのこの作品の中で、見かけから現実、あるいは本質への、主人公たちの巡礼を尽きることない想像力で描く。しかしながら、往々にしてその巡礼は失敗に終わる。彼女の作品にはしばしば、いわゆる芸術家と聖人とが苦闘しながらこの巡礼を繰り返す様が描かれる。彼女の描く芸術家は、必ずしも作品を生み出すひとという意味ではない。それは、芸術作品のように人生を生きる人物のことである。一方、聖人も、その圧倒的な魅力とカリスマ性によって、神のような力で他者を誘惑し欺くのである。⁴

マードックの考える「善または、善なるもの」とは、プラトンの思想と重なる部分が多い。彼女は、芸術、芸術家、現実を認識する力という意味での現実主義、真実、自然、美などをキーワードとして、彼女の考える「善または、善なるもの」を述べている。例えば、彼女のエッセイ “On God and Good” の中で次のように述べる。

... Almost all art is a form of fantasy -consolation and few artists achieve the vision of the real. ... A great artist is, in respect of his work, a good man, and, in the true sense, a free man. ... The appreciation of beauty

in art or nature is not only (for all its difficulties) the easiest available spiritual exercise; it is also a completely adequate entry into (and not just analogy of) the good life, since it is the checking of selfishness in the interest of seeing the real.⁵

(下線は、筆者による)

特に、上の引用の「偉大なる芸術家とは、その作品に関しては善なるひとであり、その真の意味においては自由なひとである」という言及に注目することで私の拙論を始めることとする。

第一章 最初の揺さぶり、 あるいはルパートの混乱

批評家の多くは、*A Fairly Honourable Defeat* (1970) の登場人物の中で、ジュリウス・キングを芸術家に、タリス・ブラウンを聖人に準えている。⁶ しかしながら、この対比の構図を前面に押し出してしまうと、ルパート・フォスターの存在を過小評価することになるように思われる。私は、まず、芸術家をルパート・フォスターに、聖人をジュリウス・キングに準えて考えたい。ルパートは、学者ではないが、仕事の傍ら“真の美德と道徳”についての論考をまとめようとしている。一方、ジュリウスは、彼とかかわりを持つ人物がいつも簡単にその手中に捉えられるという強烈なカリスマ性を備えている。さらに、彼らをこのように二つの対立的な構図で考えるもう一つの根拠は、この物語の一番大きな筋立てがこの二人の絡み合いにあると思われるからである。ジュリウスは、ルパートを彼の考えるある計画の中に巻き込んでいく。その最初の有益な道具として彼が用いるのは、モーガン・ブラウンである。彼女は、ジュリウスにとっては、アメリカに逃避行を企てたその相手であった。彼は、この関係を

巧みに利用する。また、ルパートとモーガンとは義理の兄と妹という関係であった。ジュリウスは、逃避行の相手であったモーガンを巧みに操り、ルパートの家族の中に巧みに入り込む。

物語が幕を開ける時点でのジュリウスとモーガンとの関係は、すでにひとつの終結を見ている。それを端的に表すものとして、モーガンが彼のアパートに押しかける描写が置かれている。モーガンが執拗に以前のアメリカでの関係と呼び戻そうとするが、ジュリウスは一切それを受け付けない。モーガンが糸纏わぬ姿でベッドに潜り込んだ後、ジュリウスは彼女の着ていた服をはさみで細切れにしてその場を立ち去る。この事件は、ジュリウスがフォスター家に入り込むきっかけを作る。彼とフォスター家とが親密な関係を持つ道筋が引かれる事になる。もちろん、彼とルパートとが全く接点がなかったわけではない。彼らは、かつて大学での知己の間柄であった。しかしながら、ジュリウスがフォスター家の人々との関わりを深めていくのには、モーガンという道具が大きな意味を持つことは否定しがたい。ジュリウスがフォスター家に混乱を巻き起こすことを考えたとき、モーガンの持つある意味でエキセントリックな性格が大きな手助けとなる。上述した場面は、そうした彼女の性格をも見て取ることができる。

ルパートは、妻のヒルダから傷心の妹の支えになることを求められた。アメリカから帰国することになったモーガンの心中をそれとなく聞き出すことが、ルパートの役目となった。芸術家である彼としては、また芸術作品のように生きる彼としては、義理の妹を放置できないという思いから、親身にモーガンの相談相手となるが、それがあだとなる。ジュリウスは、そのようなルパートの行動を巧みにフォスター家の混乱の火種として利用する。さらに、ジュリウスは先に述べたモーガンの奇異な行為を目

の当りにさせる人物として、ルパートの弟のサイモンをも彼の道具として利用する。彼は、サイモンをアパートに来るように仕向け、そこでモーガンのあられもない姿に遭遇させるのである。また、さらにその後には、ルパートとモーガンの密会の場面に遭遇させるということもお膳立てする。ジュリウスは、モーガンという向こう見ずな人物にフォスター家を揺さぶらせるだけでなく、サイモンというまた別なフォスター家の一員の影響を用いてルパートを彼の計略に誘い込み、さらには、その振る舞いをも批判するのである。

ルパートがプールで水死体で発見された後、ジュリウスは、ルパートのことを辛辣に批判する。事故死であるのか、自殺であるのか作品の中では曖昧なままであるが、彼を芸術家として位置付けてみると、芸術家の常として破滅型の最後を送ったと考えても良さそうである。さて、ジュリウスのこの批判の中には注目すべき点として“虚栄心”という言葉が現れる。彼は、ルパートの死の最大の原因は、ルパートの虚栄心であると断罪する。彼は、前置きに続いて、以下のように本題に入っていく。

‘Human beings set each other off so. Put three emotional fairly clever people in a fix and instead of trying quietly to communicate with each other they’ll dream up some piece of communal violence.’ . . .

‘ . . . She had to be the good fairy, the one with the knowledge and the power.’ . . .

‘ . . . Then suddenly being found out is ugly, nothing lofty and dignified there. Morgan turns nasty and blames Rupert. Rupert just folds up. He cannot endure the destruction of his self-respect. Rupert didn’t really love goodness. He loved a big imposing

good-Rupert image. Rupert didn’t die of drowning. He died of vanity.’⁷

(下線は、筆者による)

ジュリウスは、モーガンとルパートを批判する前に、ルパートの妻のヒルダに非難の矛先を向けている。ヒルダ (She) に対しては、「知識と力を備えた、無垢な妖精であるべきだった」とし、モーガンとルパートの二人に対しては、一旦、醜さを目の当たりにした後、「そこには、崇高さも威厳も存在しない」状態に直面し、互いを批判するという行動に出たと断罪する。そして、最大の批判の対象であるルパートには、単なる批判を超えて彼の本質的な欠陥にまで非難のメスを入れる。「ルパートは、自尊心の崩壊に耐えることはできないし、彼は、善というものをさほど愛してはいなかったし、彼の愛していたのは善なるルパートそのひとというイメージであった」というのがそれである。さらに、ジュリウスは、虚栄心こそが彼の死の原因であるとして、ルパートを虚栄心の権化のような存在に祭り上げてしまうのである。

次に、ジュリウスが、生前のルパートの前で巧みな話術を展開している場面を取り上げておきたい。ここには、ジュリウスの大きな特徴が現れている。二人のこの会話の前段には、人類が危機的な撲滅するような状況にあること、モーガンの夫であるタリス・ブラウンを軽蔑すべきではないという非難の言葉、モーガンの気持ちがルパートの存在ゆえに揺れ動いていること、などといった会話が繰り広げられる。さらに、会話の中身は哲学者や芸術家の名前に言及しながら、そうした先達の言葉の中に、ジュリウスは、彼独自の哲学を織り込んでいく。

‘ . . . Kant showed us conclusively that we cannot know reality—yet we go on obstinately imagining that we

can.'

'Kant thought we had inklings!
That was indeed his point!'

'Kant was stupidly Christian. So are you, though you deny it. Christianity is one of the most gorgeous and glittering sources of illusion the human race has ever invented.'

'Surely, Julius, you don't take the old-fashioned view that it is merely a tissue of fabrications? Is it not, in its own way, a vehicle of spirit?'

'Possibly. But what is that? Nothing could be more ambiguous.'

'Spirit may be ambiguous,' said Rupert, 'but goodness isn't. And if we—'

'As for evil being dreary, that's an old story too. Have you ever noticed how naturally small children accept the doctrine of the Trinity, which is after all one of the most peculiar of all human conceptual inventions? Grown men show an equal facility for making completely absurd metaphysical assumptions which they feel instinctively to be comforting—for instance the assumption that good is bright and beautiful and evil is shabby, dreary or at least dark. In fact experience entirely contradicts this assumption. Good is dull. What novelist ever succeeded in making a good man interesting? It is characteristic of this planet that the path of virtue is so unutterably depressing that it can be guaranteed to break the spirit and quench the vision of anybody who consistently attempts to tread it. Evil, on the contrary, is exciting and fascinating and alive. It is also very much more mysterious than good. Good can be seen through. Evil is opaque.'

(214)

(下線は、筆者による)

ジュリウスは、悪の優位を説きながら、ルパートの行為の中に潜む利己的な部分を批判しているのであろう。「一般に、善の方を、明るく美しいというように優位な立場に置いていて、悪については、みすぼらしく活気がなく闇に覆われていると考えがちであるが、実際はその逆であることを我々は経験から知っている」と説いているのは、後に彼が断罪するルパートの虚栄心をも批判しだした箇所であると読めるであろう。ジュリウスは、「善は透けて見えるが、悪は中身を見ることができない」と言っている。それは、善を、ちっぽけで、乱雑で、限度があり、切りつめられていて、活気がないと断罪するのに反して、悪には、人間の本質に迫る何かがあるとするものである。

第二章 第二の揺さぶり、 あるいはサイモンの脆さ

この物語の中には、奇異な感じを受ける人物がいる。それは、サイモン・フォスターである。彼もまた、ジュリウスに翻弄される人物である。しかしながら、彼の場合は、すでに述べたルパート・フォスターやモーガン・ブラウンとは異なる形で、ジュリウスの思うがままに操られる。彼について注目すべき事柄は、彼が同性愛者としてこの物語に登場しているという点であろう。今だ世間では市民権を得ていないせいであろうが、彼のこの人物設定が彼の“弱さ”の最大の原因を作り出す要因であると推測される。⁸

サイモンは、アクセル・ニルソンというパートナーと一緒に暮らしている。物語の第1部第2章の描写からは、彼とアクセルとは、いわゆる付かず離れずの関係で結びついていることを見て取ることができる。

サイモンは、彼とアクセルとの違いを明確に意識しながら、アクセルの愛情に包まれていたいという思いを強くする。彼のモーガンへの、義理の弟としての思いやりは、ともすれば何者かに利用される危うさを秘めている。ここに、ジュリウスは巧みに取り入り、サイモンを彼の計略を押し進めるための重要な手段として利用するのである。ジュリウスが彼に近づくのは容易である。ジュリウスとアクセルは知己の仲であった。そして、第6章において、ジュリウスは彼の計画の第一歩の布石を打つ。彼は、サイモンに彼のアパートを訪ねてくるように言う。この誘いを受けてジュリウスのアパートに行ったサイモンは、ひとつの事件に巻き込まれる。この出来事は、それ以降の彼がジュリウスに左右されることの大きな原因となる。この事件は、モーガンを絡めた3人の関係を作り上げるきっかけとなる。ジュリウスの求めに応じてアパートに行ったサイモンは、そこに置き去りにされたモーガンと出会う。彼女は、脱ぎ捨てた服を失い身動きのできない状態で放置されていた。サイモンは、彼の側に非があるのではないにもかかわらず、モーガンの誘いに応じたことからアクセル・ニルソンへの秘密が生まれ、ジュリウスの“支配下に”置かれるのである。

第2部第3章では、ジュリウスは、サイモンにルパートとモーガンの密会の場面に遭遇させる。サイモンは、その場面を目にしたこと自体に強い嫌悪の気持ちを感じる。彼は、眼前に展開した光景を、彼の意識から排除しようとするのである。しかしながら、ジュリウスは執拗にサイモンを精神的に追い詰める。また、同時に、ジュリウスは、眼前に展開された光景を彼が口外しないように周到に事を運ぶ。その際にも、ジュリウスはサイモンの弱みを巧みに利用する。ジュリウスは、サイモンがアクセルと親密な関係にあることを利用する。ジュリウスは、サイモンが彼に同性愛の恋人に対

するような振る舞いをしたという事実をアクセルに知らせるといったものであった。やや不自然なところもあるが、サイモンはこの脅かしに簡単に屈してしまう。以下に、サイモンの眼前に展開したルパートとモーガンとのやり取りの場面を引用する。ジュリウスの意図は、以下の場面においてすでに明白である。フォスター夫妻の平穏な夫婦関係に亀裂が走り始めている。ここで、我々は、彼の計画が着実に進行していることを知るのである。

‘Everything seems changed.’

‘Change must be endured too. But we are still the same two people. And we have known each other a long time.’

‘Yes, that is so important, isn’t it. I knew you’d be wise and sensible about it. You are so wise about everything.’

‘It’s not easy to be wise in a situation like this.’

‘If any man could be it would be you.’

‘You see, my dear, I don’t underestimate its gravity.’

‘Good heavens, neither do I! Oh Rupert, I’m so touched—you’re so sweet to me—’

‘How did you expect me to be? One mustn’t get excited. One mustn’t run away either, must one? You agree about not running away?’

‘Yes, I do. I’ve thought about it a lot. It would be such a *blank* thing to do. Rupert, you haven’t told Hilda about this?’

‘No. And I won’t. It’s I better not.’
(254-255)

この場面に現れているように、作者は、

我々にジュリウスの計略がモーガンを媒介にして着実に進行している様を提示している。そして、さらには、ジュリウスがこの場面にサイモンを立ち合わせるにより、物語がさらなる段階に入ったことを暗示している。

最後に次のエピソードをあげておきたい。物語の当初のルパートは、傷心の状態でアメリカから帰国したモーガンに対して以下のような言葉をかけている。

‘ . . . Rupert, I depend terribly on this stuff. Is it wrong?’

‘You keep asking me that question about all sorts of things! Well, you’d better watch it. I must say, I depend on it too.’

‘What a bloody wreck my life is.’

‘Don’t be foolish, Morgan. If you use your mind and your heart you can put everything together again.’

‘My mind is bedlam and my heart’s dead.’

‘That’s not true and it’s treachery to say so.’

‘Treachery—to whom, to what? There isn’t a God.’

‘You know quite well what I mean.’

‘Oddly enough I do. . . .’ (81)

(下線は、筆者による)

「もし、物質的にも精神的にも自分の心を用いるとき、ひとは、再びすべてのものを元の状態に戻すことができる」という言葉には、ルパートの妹を思う気持ちが強く反映されていると思われる。ここで、ルパートのこうした優しさが悲劇を生み出す要因であったことを我々に知らせてくれる。一方、ルパートが“反逆”という言葉を用いたとき、モーガンは「この世に神様はいない」と言うが、ここには、彼女の自由奔放な性格が垣間見えているように思われる。

この彼女の性格が、ルパートとヒルダという一組の夫婦の關係に亀裂を生じさせるもう一つの大きな要因である。

第三章 最後の仕上げ、 あるいはヒルダの混乱

ルパートとモーガンとを密接に結びつけた後、サイモンの心を牛耳ると、ジュリウスは、最後の仕上げに取り掛かる。それは、ルパートの妻のヒルダにそっと耳打ちをすることであった。ルパートが彼に会うためと言って外出したあと、ジュリウスはフォスター家を訪問しヒルダと言葉を交わす。彼が姿を現すことによって、まず、ルパートが嘘をついていたということをヒルダの心に植えつける。そのとき、彼は周到に小道具を用意する。彼は、嫉妬の色である黄色いバラの花束を持参する。そして、ヒルダが、彼女の夫と妹との間に男女の關係があるのではと疑いだすと、彼はそれをはぐらかしながら、一方で、彼女の心を追いつめていく。そして、最後に、彼は以下のような言葉で締め括る。

‘Probably a nothing, Hilda,’ said Julius, giving her his full heavy stare. He seemed grave and upset. ‘Probably a shadow that will vanish away as if it had never been. A shadow which, believe me, it is very much wiser and *kinder* simply to ignore. I am afraid that our last conversation must have sounded to you rather portentous. And I would certainly not have expressed myself in that way if I had thought—you see, I imagined that they must both have told you everything—in fact I took this as a proof that it was all really something quite unimportant. I must say, I was rather relieved.’ (313-314)

この言葉は、ヒルダの不安を駆り立てるために意図されたと受け取れる。一方で、ジュリウスの行動には、不可解な部分が見られる。最終的な物語の結末を見た読者は、彼の行動が原因で、一人の人間が死に至ることを知る。自殺か事故死かはあいまいな描き方をとってはいるが、いずれにせよ、ジュリウスがその前段階をお膳立てしたことには変わりないであろう。また、モーガンとの絡みの中で最も印象的な場面では、彼はモーガンが彼の部屋から出ることができないように、彼女の衣服を短冊のように切り刻んでしまう。

ジュリウスにこのような行為をさせている要因は、一体全体何であろうか。Boveは、彼を“闇を体現する人物”や“悪魔を具現した人物”と批評している。⁹ また、Conradiは、彼を“サタン”と称している。¹⁰ 以下に、Conradiの言葉を引用する。

Julius's diabolism is contested by the novel's own peculiar achievement. 'What novelist ever succeeded in making a good man interesting?' Julius asks provocatively (223). Tallis, the book's Christ-figure, is both good and interesting. Rupert, whom Julius addresses here, and who gets destroyed, is both less good and less interesting. The book to that degree disconfirms what Julius knows. The characters are wholly persuasive and sympathetic creations, with a being which extends generously beyond the immediate requirements of the plot and idea-play. The depiction of a happy homosexual relationship between Simon and Axel is itself a small triumph. To the degree that any are dull, to that degree they are evidence for Julius's prosecution, since Julius sees human beings as profoundly conven-

tionalized and tending to stock type. If the book fails for Murdock it succeeds for Julius. The title, which refers to the defeat of good by evil, here enters oddly into the book's substance. *A Fairly Honourable Defeat* is a research into the substantiality of the self.¹¹

(下線は、筆者による)

「ジュリウスは、人間をとてつもなく因習的で、ありふれた性格に陥りがちな存在であると考えるので、彼の周りの他の登場人物たちは、ジュリウスの悪魔的な行いの十分な根拠を与えている」というこのコメントは、ジュリウスが次々にひとの心を牛耳る理由を明らかにしている。彼は、ありふれた因習的な状況の外に出ようとしないう人々を厳しく非難しているのである。それは、ある時には、モーガンの衣服をハサミで切り裂くというエキセントリックとも思われる行動となって現われるのである。

第四章 タリス・ブラウンの存在、あるいは二つの役割

ジュリウスとは正反対の人物として、タリス・ブラウンがいる。タリス・ブラウンは、極めて地味な存在である。しかし、物語の中で、彼は、モーガンの夫という役割を与えられている。それは、極めて対照的な二人を我々の前に提示することになる。すでに、言及してきたように、彼の妻モーガンは、夫の元を離れアメリカで別な男と暮らしていた。一方、彼は、そうした妻の行為に対して“声を荒らげる”ことなく、静かに自分の生活を送っている。彼が彼の父親と交わす会話から、時として、彼の内面の意思のようなものを垣間見ることできるが、そこに流れるトーンは地味一色に感じられる。

この物語の始まりは、彼の妻のモーガン

が、イギリスに帰国するという出来事により始まる。モーガンのアメリカへの逃避行の相手は、ジュリウス・キングであった。すでに述べたように、多くの批評家が、タリスをキリストに準え、悪の具現者サタン＝ジュリウスとは対照的な構図で捕らえられている。それは、つまり、地味で特に目立たない存在であるにも拘らず、彼が重要な人物であるとみなされていることの証である。では、どのような点が、彼を重要たらしめているのであろうか。

まずは、タリスという人物を考えるために、以下の箇所を見ていくこととする。

In a mechanical and repetitious way these exhausting manifestations were accompanied by the idea of love. The connection was mechanical and puzzling and Tallis seemed to know merely by some sort of external association or semiconscious memory, and not by direct experience, that this concept was somehow involved. He accepted the connection, since he had by now almost entirely given up speculation. He felt a bond at such moments not with anything personal but with the world, possibly the universe, which became a sort of extension of his being. Occasionally the extension was gentle and warm, like the feeling of a river reaching the sea. More often it was uncomfortable or even horrible as if he had immense dusty itching limbs which he could not scratch. Sometimes he felt an awful crippling weight, as if a steam hammer were very slowly coming down on top of his head. On two extraordinary occasions the stream hammer phenomenon had been immediately combined with the feet-off-the-ground

phenomenon and Tallis had lost consciousness. (199-200)

「タリスは、意識をなくしてしまった」という描写で終わるこの場面は、彼がモーガンと相対しているときのものである。彼は、モーガンと如何に対峙していくのかの方策を見出せなくなってしまうのである。これは、彼がモーガンに話をしているときの表面的な感情からはわからないことである。

また、さらに続けて、タリスとモーガンの夫婦の関係は以下のように示めされる。

‘I’m your husband.’

‘That ugly heavy word. That cannot name anything here.’

‘It names an important fact, Morgan. I think you are mistaken about your nature. You need deep belongingness and connections and stability.’

‘And why shouldn’t I have them all over the place? Or are you trying to use your authority?’

‘Funny. Rupert talked about authority. But it’s nothing to do with authority or property rights. What can I do or ask for in the ridiculous position I am in now? I am sure that you love me. I just want that love to have a decent chance.’ . . .

‘Sorry, Tallis, I don’t want to be unkind. But the path for me is away from guilt and shame. I think I wanted to sink down into some deep deep sea with you. When I married you I felt I was killing myself. It seemed somehow wonderful at the time. But I couldn’t kill myself. I couldn’t even love in the end, down in that deep sea. I have to be outside, in the open, in the clear air, on the high

places, free, free, free. It's only out in that clear fresh air that I can really love people. I have to follow the kind of love that I am capable of. Everybody must be guided by that.' (204-205)

(下線は、筆者による)

この引用の中には、二人の考え方の隔たりが明確に示されている。モーガンが何ものにも束縛されない愛を主張するのに対して、タリスは、彼女には“安定と帰属”が必要だと論駁する。それに対して、モーガンは、帰属する場合であっても、たった一つのものにだけ帰属することには耐えることができないと表明する。現に、彼女にとってはまさにタリスとの結婚生活がそれを実践するものであったと告白している。

ジュリウスは、このようなモーガンの人間性を巧みに利用したのかもしれない。タリスは、「今でも、お前は僕のことを愛している」と言って、二人の関係を修復しようという思いを表明しているように見える。しかし、彼の受けた仕打ちを考えるとその本心は定かではない。一方、モーガンは、何物にも束縛されない自由人でありたいという思いを「私が本当にひとを愛することができるのは、外の世界のきれいで新鮮な空気を吸っているときだけなの」と表明する。また、タリスにはもう一つ別な役割がある。“乱雑さ”の中に生きるタリスに向かって、ジュリウスはそのような状況から抜け出すように求める。彼はまた、彼がフォスター夫妻に施した策を説明する。嫉妬を起こさせるために、恋文を探し当てて、それらを巧みに利用したという告白である。¹²すでに言及したように、彼は、人間が有する「虚栄心」を巧みに利用する。つまり、タリスは、ジュリウスが語る彼の真の意図を聞くことになる人物である。これがタリスのもう一つの役割である。

ジュリウスは、人間には虚栄心があり、

それがひとの気持ちを左右するということを我々の前に明確な形で提示しているのである。しかし、ジュリウスの行為の問題点は、その結果でひとが一人死んだという事実にある。彼は、結果的にルパートを死に至らしめることになった。すでに言及したことであるが、ジュリウスは、「善というものをさほど愛していなかった」という言い方でルパートを辛らつに批判していた。ジュリウスにとっては、善という存在が重要であるということができよう。プラトンが、真実の姿を見ていない状態を、壁に映し出された影を見ているに過ぎないと説明したように、ジュリウスも、ルパートが自己の虚栄心に行動を左右されている様を、真に善なるものが理解できていない状態として、虚像を見ているに過ぎないと断罪するのである。それゆえ、彼がルパートを自己の虚栄心に直面させたことは、例えそれがルパートの死を引き起こすものであっても、ジュリウスに動揺はない。彼にとっては、人間の本質を真に理解することが重要である。それは、自己の本来の姿をしっかりと認識していることといえよう。

おわりに

“善”の意味を考えたとき、善なる行為を行っていなかった人物としてルパート・フォスターがいる。これは、ある意味で、この論の始めに当たって私が仮定した登場人物たちの位置付けとは矛盾することかもしれない。私は、まず、ルパートを芸術家と位置づけ、ジュリウスと対照させて捉えるために、ジュリウスは聖人と考えた。マードックによれば、芸術家とは、とりわけ“偉大な”という形容詞がつく場合、善なる人物でなければならないということも見えてきたとおりである。それは、人間の本質を真に理解する人物である。ルパートが、善なる人物でないとしたら、モーガン・ブラウンも同様に自己の本来の姿をしっかりと

と認識していない。一方、サイモンとアクセルはどうであろうか。彼らも、ジュリウスの思いのままに操られたという点からは、やはりその行動に善なる要素が足りなかったことを示している。結局、彼らはすべて、芸術家、あるいは、いわゆる善なる行為を行いうる存在ではなかったのである。一方、ジュリウス自身はどうであろうか。それは、これまで私が彼を中心として、この作品 *A Fairly Honourable Defeat* を分析してきたことから明らかであろう。あくまでも、ジュリウスはただひとり人間の本質を真に理解する人物として、善なる人物なのである。

この拙論において、私はプラトンのいう“善”を作品 *A Fairly Honourable Defeat* の中に見てきた。タイトルにある“相当な程度まで尊敬に値する敗北”をした人物は誰であろうか。“相当な程度まで”という形容詞を多分に皮肉を込めた意味に解釈するなら、ルパートがその人物と考えてよさそうである。ジュリウスの解説を用いれば、彼は、自分では正しい行動をしているつもりであるが、「虚栄心」に振り回され自分を守ることに精を出す人物である。つまり、そうした「虚栄心」こそが、ルパートを死に至らしめた最大の要因であろう。アイリス・マードックは、ジュリウス・キングという登場人物を創造しその人物に“善なるもの”を体現させた。しかしながら、彼は、一方で、それとは相反する“悪なるもの”をも内包している。それは、ジュリウス・キングを人間味あふれる人物にしようとした作者の意図の反映なのかもしれない。また、それは、ルパート・フォスターという人物の本当の姿をさらけ出させるための方法であったのかもしれない。つまり、ジュリウス・キングは、聖人のごときカリスマ性を持ち、時には“悪なるもの”をも全面に押し出すことのできた“芸術家”という役割を演じた結論付けてよさそうである。

注

¹ Bran Nicol. *Iris Murdoch for Beginners* (New York: Writers and Readers Publishing, 2001) 50-3

² Bran Nicol, 63-4

³ Bran Nicol, 75-8

⁴ Bran Nicol, 79-82

⁵ Peter Conradi ed. *Iris Murdoch Existentialist and Mystics* (Harmondsworth: Penguin Books, 1999) 352

⁶ この解釈については、マードック自身もベラミー (Michael O. Bellamy) とのインタビューの中で同様のことを言っている。(Gillian Dooley ed. *From a Tiny Corner in the House of Fiction Conversation with Iris Murdoch* [Univ. of South Carolina, 2003] 51) しかしながら、私は、悲劇的な最後を遂げる人物として、ルパート・フォスターをジュリウス・キングと対比させて物語を解説していくこととする。

⁷ Iris Murdoch. *A Fairly Honourable Defeat* (London: Vintage, 2001) 419-420 以後、この作品からの引用は末尾に頁数のみを記すこととする。また、作品名は *FHD* と記す。

⁸ サイモン・フォスターが同性愛者であるという点については、グリムショー (Tammy Grimshaw) が詳しく論じている。グリムショーは、1968年に出版されたメアリ・マッキントッシュ (Mary MacIntosh) の“A Homosexual Role”の言及に触れ、マードックの描くこの人物が出版当時の社会情勢を反映していると述べている。(Tammy Grimshaw. *Sexuality, Gender, and Power in Iris Murdoch's Fiction* [Fairleigh Dickinson Univ. Press, 2005] 35-44) この中で、グリムショーは、作品発表当時は同性愛者に対する社会の対応が差別的であり、往々にして同性愛者の男性は女性的であると見なされたと指摘している。サイモンから受ける印象が何かしら女性的で弱々しいものとなっているのは、こうした事情が反映しているのであろう。

⁹ Cheryl K. Bove. *Understanding Iris Murdoch* (South Carolina: Univ. of South Carolina, 1993.) 68

¹⁰ Peter J. Conradi. *The Saint and the Artist A Study of the Fiction of Iris Murdoch* (London: Harper Collins Publishers, 1989) 205 以後、この作品は *SA* と記す。

¹¹ Peter J. Conradi. *SA*, 204

¹² *FHD*, 396-399

参考文献

- Antonaccio, Maria & Schweiker, William eds.
Iris Murdoch and the Search for Human Goodness. The Univ. of Chicago Press, 1996.
- Bayley, John. *Iris A Memoir of Iris Murdoch*. Abacus, 1999.
- Bayley, John. *Iris and Her Friends A Memoir of Memory and Desire*. W. W. Norton & Company, 2000.
- Bove, Cheryl K. *Understanding Iris Murdoch*. Univ. of South Carolina Press, 1993.
- Conradi, Peter J. *Iris Murdoch A Life*. Harper-CollinsPublishers, 2002.
- Conradi, Peter ed. *Iris Murdoch Existentialists and Mystics*. Penguin Books, 1999.
- Conradi, Peter J. *The Saint and the Artist A Study of the Fiction of Iris Murdoch*. Harper-CollinsPublishers, 2001.
- Dooley, Gillian ed. *From a Tiny Corner in the House of Fiction Conversation with Iris Murdoch*. Univ. of South Carolina, 2003.
- Grimshaw, Tammy. *Sexuality, Gender and Power in Iris Murdoch's Fiction*. Fairleigh Dickinson Univ. Press, 2005.
- 蛭川久康 『マードック—幻想の不毛から愛の豊饒へ』 冬樹社, 1979.
- Nicol, Bran. *Iris Murdoch for Beginners*. Writers and Readers Publishing, 2001.
- Nicol, Bran. *Iris Murdoch The Retrospective Fiction*. PALGRAVE MACMILLAN, 2004.
- Murdoch, Iris. *The Sovereignty of Good*. Routledge & Kegan Paul, 2001.
- Wilson, A. N. *Iris Murdoch as I Knew Her*. Arrow Books, 2004.

作品

- Murdoch, Iris. *A Fairly Honourable Defeat*. Vintage, 2001.

ABSTRACT

A Fairly Honourable Defeat :
Iris Murdoch's Portrayal of Good or Goodness

Yasushi Nakakubo

The focus of this paper is an examination of Iris Murdoch's idea of "good or goodness" through her novel, *A Fairly Honourable Defeat*.

First of all, I will look into the way one character influences other characters. He is the most impressive character, Julius King. In Chapter One, I will discuss how he tries to manipulate Rupert Foster, who becomes his easy target. Another character, Morgan Browne, is Rupert Foster's sister-in-law. Julius utilizes this brother and sister relationship. He skillfully encourages them to love each other, and also forces Rupert to face his own vanity. This is the first stage of Julius' devilish plan. Julius also tells his target about his own concept of good or goodness. This seems to be Iris Murdoch's own conception of good or goodness, or the idea she wishes to focus on.

Secondly, I will focus on Julius' various aspects, as he gets into the second stage of his plan. In Chapter Two, I will discuss his second target. He makes use of one character, Simon Foster, who is Rupert's brother. Simon is a homosexual with a weak personality. Julius never overlooks his homosexual relationship with Axel Nilsson. He gets Simon into trouble. One day, he goes to Julius' apartment and meets Morgan Browne, who has been left naked there. She earlier visits that apartment without saying anything, and takes off her clothes in front of Julius because she wants to recover their former relationship. Despite her attempts, Julius never takes in such a request. To make matters worse, after she goes into his bed, he cuts her clothes into pieces and leaves there. Just after that incident, Simon appears. He never expects to see his sister-in-law there, and is so upset. Unfortunately Simon is left there naked in turn, because Morgan borrows his clothes and goes back home. Julius takes advantage of this situation and encourages Simon to think that his boyfriend knows it and leaves him. Eventually, Simon is trapped in the "cobweb" of Julius King.

Finally, I will focus on the last of Julius King's performances. In Chapter Three I will discuss Julius' final action. He whispers to Rupert's wife, Hilda. When she hears from him, she is extremely puzzled, and leaves home. This incident seems to lead Rupert to his death. In Chapter Four, I will discuss a unique character, Tallis Browne. He is the husband of the key character, Morgan Browne. However, he himself is unremarkable and seems to be worthless. He is hard to understand because critics never fail to think of him as an important person. They think he looks like Jesus Christ when they compare him to Julius. One critic, Bran Nicol, regards Tallis as a saint while Julius is regarded as an artist. When we think that Tallis Browne plays an important role, we can focus on two scenes. One of them is when he meets Morgan just

after she returns from the U.S. The other is when Julius tells him about why he has to behave devilishly.

In conclusion, I will make a quick return to my comments in the chapters above. Who on earth has played his or her role as a person with goodness? When we follow what Julius King has said and done, we seem to recall several significant scenes. At times he has lectured on his so-called philosophy. At other times he has strictly criticized what Rupert Foster does as well as what other characters do. When we dare to regard Rupert as an artist and Julius as a saint, it seems that brother-in-law of Morgan Browne is “a fairly honourable loser”, and our attractive character is a winner. In one of her essays on goodness, Murdoch says, “A great artist is, in respect of his work, a good man, and, in the true sense, a free man.” Rupert comes to an end as a loser, found dead in the swimming pool, because he tries in vain to be a true artist. On the contrary, Julius becomes a person who allows Rupert to face his real self. As Julius says to Tallis Browne about Rupert, “He cannot endure the destruction of this self-respect. Rupert didn’t really love goodness. He loved a big imposing good-Rupert image.” So, I conclude that a true “good” person does goodness to others even if he himself behaves devilishly. It is Julius King who understands what good or goodness is.